

吉田明弘¹: 報告—第23回日本植生史学会談話会Akihhiro Yoshida¹: Report—The 23rd forum of the Japanese Association of Historical Botany

第23回日本植生史学会談話会が2005年5月14日・15日に山口県東部において行われた。今回のテーマは『後期更新世以降の植生史を解明するために重要なフィールドとなった盆地群と火山活動、そしてスギ埋没林』で、辻誠一郎氏(東京大学)・木村勝彦氏(福島大学)・河村吉行氏(山口県史編さん委員室)の案内のもと見学会が催された。14日は徳佐・沼原・宇生賀盆地での現地紹介と討論、15日は宇生賀盆地に埋没していたスギ巨木、長登銅山跡遺跡を見学した。両日ともに天候に恵まれ、学生や研究者など計25人の参加者があった。

14日は、徳佐、沼原、宇生賀の3つの盆地をバスで巡った。現地では、それぞれの盆地での花粉分析や植物遺体などの植生史的研究の概要が紹介され、泥炭を堆積させる環境を作り出した青野山火山群・阿武火山群の活動時期や様式について説明がなされた(図1)。特に、参加者から今回のテーマであるスギ埋没林の生態的特徴や既存研究の問題点、今後の各盆地における研究の発展性について多数の質問や意見が出された。

その晩は、むつみ温泉に宿泊した。夕食後の懇親会では、親睦を深めるとともに活発な議論をすることができた。また、翌日に訪れる予定である宇生賀盆地のスギ埋没林について箱崎真隆氏(福島大学)からの興味深い報告があり、翌日の見学への期待が膨らんだ。

15日は宇生賀盆地と萩市笠山、長登銅山跡遺跡などを巡った。宇生賀盆地では、耕地整備の際に泥炭地から掘り

起こされたスギの巨木・根株を見学した(図2, 3)。埋没していたスギの根株の保存状態は良好であり、その数の多さに驚かされた。スギの根株は軟弱地盤にも耐えられるよう平板状であり、当時のスギ湿地林を想像するのに大変参考になった。また、樹幹部分には古代の人々が残した伐採痕があり、伐採・運搬方法や用途について参加者の間で多数の意見が百出した(図4)。その後、辻氏によって採取された宇生賀盆地のボーリングコアの紹介がされ、バスにて萩市笠山、長登銅山跡遺跡へ移動した。

笠山では、阿武火山群が作り出した特徴的な地形であるスコリア丘や溶岩台地について紹介があった。長登銅山跡遺跡では、銅鉱山の歴史や出土品の木簡、古代祭祀で使われたひょうたんの紹介があった。時間の関係上、明治期に用いられた精錬場跡と坑道跡のみの見学となったのが残念であったが、精錬の際に残渣として出されるカラミ(鉄など)山に当時の人々の苦労や銅山の繁栄が想像された。その後、バスで新山口駅まで移動して、解散となった。

これまで古環境を解明する手段として、花粉分析、珪藻分析、植物遺体分析などの分析方法が用いられてきた。この分析データと地形や地質などの堆積環境を理解することで、より正確に古環境を把握できる。近年では、時間的分解能を上げる研究が盛んに行われている。一方で、過去における植生の空間的な分布やそこから理解できる生態的特徴について把握する研究が始まっている。その意味でも、今回の談話会は各盆地や遺跡を巡り、堆積環境やスギ埋没



図1 沼原盆地において案内役の辻誠一郎氏から説明を聞く参加者(撮影:吉田明弘)。

林を実際に見学することにより、植生史研究の重要性や今後の方向性について有意義な議論ができた。

今回、案内をして頂いた辻誠一郎氏・木村勝彦氏・河村吉行氏、行事委員清永丈太氏・辻圭子氏、また談話会に協

力して頂き有意義な議論の場を提供して下さった山口県史編さん室の皆様がこの場をお借りして御礼を申し上げます。(〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3 東北大学大学院理学研究科地理学教室)

貞方 昇¹：第23回日本植生史学会談話会報告

Noboru Sadakara¹: Report—The 23rd forum of the Japanese Association of Historical Botany

2005年5月14・15日の両日、第23回エクスカージョンが、山口県を舞台に、辻誠一郎氏、木村勝彦氏、河村吉行氏の案内のもとに実施された。参加者は25人であった。テーマは、「山口県東部における後期更新世（最終氷期）以降の植生史、その情報をもたらした堆積物の堆積場をつくった火山活動、そして巨大なスギ埋没林」(当日配布資料による)であった。初日の主な見学先は徳佐盆地、青野山麓沼原盆地、むつみ村宇生賀盆地、2日目は再び宇生賀盆地、萩市笠山、そして美東町長登銅山跡遺跡であった。両日とも好天に恵まれ、地ビールまでも飲める楽しいエクスカージョンとなった。ところで、筆者は、自然地理学を教える山口大学教員で、実は学会員でもなく(にも関わらず参加させて頂いた)、花粉分析を専門ともしていない。当然、報告が雑駁であることをお許し頂きたい。

初日午後1時過ぎにバスは新山口駅を出発。国道9号線を徳佐盆地に向かった。その途次、新緑の山麓を取り巻くように、アクセントをつける無数の白いシノキの花が皆の目を引いた。木戸山トンネルを抜けると、南西-北東方向の構造線に沿う谷が見る間に幅を広げ、数段の段丘(上

位は湖成段丘)も見られるようになり、やがて徳佐盆地の見学地に着いた。ここでは北東方向に流れていた旧津和野川が野坂山ほかの更新世後半期に活動した溶岩円頂丘群により堰き止められ、一時、「古徳佐湖」が出現したとされる。露頭観察はできなかったが、厚い湖成層を対象とした三好・畑中(1985)、三好(1991)の花粉分析ダイアグラムが検討された。辻氏の説明によると、Aso-4と思しき火山灰の記載や最終氷期の寒冷化をしめすような樹木花粉組成の変化が認められるが、サンプル採取地点の記載がないのが惜しまれるという。次いで、青野山麓沼原湿原に場所を移し、杉田・塚田(1983)の過去1.7万年間の花粉変遷ダイアグラムが検討された(図1)。組成に関する議論の前に、各深度の年代値を改めて調べ直す必要が強調された。この後、宇生賀盆地に向かった。周囲を更新世に活動した溶岩台地に囲まれたこの小盆地は、他から入り込む者には、あたかも桃源郷を思わせる景観である。平成10年に行われた土地改良事業により、深度50cmまでに伏在するすべての埋没林が取り払われたという現地の方のお話。まずは道脇に積まれた出土埋没林の一部を見学(図2)。ほとんど全



図2 宇生賀盆地から掘り出されたスギの根株をみる鈴木三男氏(撮影：吉田明弘)。

てがスギ。展示された幾つかの大型「埋もれ木」をもとに、根を深く張るよりも、水平に広がる根をもっていたらしいことなどが話合われた。また、幾本もの材に残された伐採痕から、比較的小さい幅の鉄斧で伐採されたらしいことも話題となった。三好 (1980) による現地堆積物の花粉ダイアグラムの説明とともに、辻ほかが採取した最新の堆積物サンプルが示された。AT の挟在は明白な一方、アカホヤは未確認。ここでは深度 30 m 以上の湖成堆積物が得られるかもしれないとのこと。

山をなす「埋没林」の見学は翌日にして、昔ながらの宿「むつみ荘」着。食後、おそらく例年の如くの交歓会があり、賑やかに歓談。その中に箱崎真隆氏 (福島大院) による宇生賀埋没林の年代決定及び古生態の復元についての研究紹介があった。スギの不定根形成次第をめぐって皆の話がはずみ、あわせて研究の進展が期待された。

翌朝、積み上げられた埋没林の現場に向かう。あまりの数の多さと、雑草が表面を覆うようになっている現状に皆、しばし呆然 (図 3, 4)。そのうち、径 1 m を越える材も見つかり、議論開始。湿地あるいは低地で長く成長するスギの生態について、まだ知らないことが多いのではないかと

いう意見が多く出たのが印象的であった。この後、萩市笠山に向かった。このスコリア丘火山は 8800 年前に噴火活動を行ったともいわれ (永尾, 2002), 活火山の仲間入りをしそうである。山頂まで歩いた後、麓の「萩ビール・村塾」にて地ビールを味わい、周辺の椿ほか、新緑の常緑広葉樹を鑑賞。一同バスで一眠りした後に、美東町長登銅鉾山跡に到着。奈良期に遡り、東大寺大仏鑄造原料をも産した日本最古の銅鉾山跡を現地指導員の方の案内で見学。赤銅色の銅滓の広場を歩き来した。そしてバスは予定の時刻に新山口駅着。

連続的な更新世後半の古植生復元の可能性を持つ盆地堆積物や植物生態の多様性を物語りそうな埋没林ほか、話題豊かなエクスカージョンであった。これを機に山口の地におけるこの方面の研究が大きく進展することを祈念したい。

最後に、今回の行事開催に骨を折られた清水丈太氏はじめ、関係の方々に厚く御礼を申し上げます。

(〒753-8513 山口市吉田 1677-1 山口大学教育学部地理学研究室)



図 3 宇生賀盆地から掘り出された根株の山 (撮影: 吉田明弘).



図 4 宇生賀盆地から掘り出された根株にみられた伐採痕 (撮影: 吉田明弘).